

先週の礼拝メッセージ(2022年12月18日) ベン牧師

「信仰の知と傲慢の無知」 マタイによる福音書 2:1-12

今日の箇所は、東方の国から博士たちがやってきて、イエス様を礼拝したというお話です。

彼らは占星術の学者たちと記されています。平たく言えば星占いをする人たちです。占いは律法で固く禁じられています。それなのに、マタイの福音書では、それを生業としている人たちが最初にメシアを礼拝する人として選ばれ、聖書に、それもユダヤ人へ宛てた福音書に記されているというところにも、大きな神様からのメッセージがあるのです。誤解のないように申し添えますが、彼らは天文学者、気象学者でもありました。天気や星の位置、見え方などから、その年の収穫、干ばつや洪水などを予測し、王様に政策を進言するという仕事です。ですからその国の高官でもありました。そんな彼らが、イエス様を礼拝するためにはるばるやって来たというのは、決死の覚悟であったことも事実でしょう。また、彼らが、星からユダヤの王の誕生を知ったのは、おそらく聖書の民数記の記事から「ひとつの星がヤコブから進み出る。」(24:17)という預言を知っていたと思われる。

そんな彼らがユダヤのエルサレムの神殿にヘロデ王を訪ねるのです。ヘロデは政治的には有能な王でしたが、権力にしがみつくとということにおいては、疑い深く、嫉妬深い性格で、王位を奪われないように家族親族でも、疑わしい人物は平気で殺すという悪王でした。そんな彼のもとに、東方から博士たちがやってきて、王の誕生を知らせたのです。その時のヘロデの反応が非常に興味深いものです。ヘロデは不安になって、祭司長や律法学者を集めて、「メシアはどこに生まれることになっているのか」と問いただしたというのです。ヘロデは博士たちの「王が生まれた」と言う知らせを聞いた時、すぐに「メシアが生まれた」と理解したのです。ヘロデは聖書の知識として、メシアが来られることを知っていました。そして、メシア誕生は自分の王位が脅かされるということも知っていました。そうなった時、神の約束と自分の権力や立場を天秤にかけ、後者を優先させてしまったのです。ですから、メシア到来のニュースを聞きながら、礼拝するどころか、メシアを亡き者にしようと画策するのです。

さらに、律法学者たちに目を向けると、彼らは聖書の知識は誰よりもありましたが、王の問いに「ユダヤのベツレヘムです」と即座に答えるこ

とができました。ただ彼らは、聖書を自分の都合に合わせて解釈し、自分たちの権威を守るのを優先させてしまいました。ですから彼らは、メシア到来のニュースを聞いて、場所も分かっている、誰一人としてイエス様を礼拝しにいかうとはしませんでした。

聖書を勉強しても、多くの知識を持って、どんな質問にも即答できても、彼らは聖書を神の言葉と信じていなかったのです。

ここに出てくるヘロデ王とユダヤ教のリーダーたち(サドカイ派)に共通しているのは、神の言葉よりも自分の都合のほうが大切だということです。

東方の博士たちは、聖書のことはほとんど知らない人たちでした。しかし、救い主到来のしるしを見た時、それが星占いからであったとしても、わざわざユダヤまで長い旅をしてやってきたのです。そしてベツレヘムでイエス様を礼拝し、黄金乳香没薬をお捧げしたのです。この後、彼らは夢でお告げを受けて、来た道とは別の道を通って帰って行ったと12節に記されています。文字通り、エルサレムを通らない道ということですが、もう一つ、イエス様を礼拝したことによって、彼らの心が変わられたということも暗示しているのではないかとされています。博士たちは、聖書知識ということにおいては無知でしたが、救い主を心にお迎えするという点においては、大切なことを知りました。逆に、ヘロデ王や律法学者たちは、聖書知識は豊富でしたが、自分を優先させるが故に、救い主のことを何も知らずに終わってしまいました。

知るということにはふた通りあります。情報から知るというものと、交わりから人となりを知るということです。知っています、と私たちが言う時、どちらを指して言っているでしょう。博士たちはイエス様のもとに行き、イエス様を礼拝し、神の約束の確かさを身をもって知ったのです。そして神の前にへりくだることができた人たちです。ヘロデや律法学者たちは、傲慢のゆえに聖書知識はありながらも救い主を知ることはありませんでした。

もちろん聖書を学ぶことはとても大切です。しかし救いに知識は必要ありません。イエス様を心から信じ、十字架の赦しと救いを素直に信じることが、何をおいても第一なのです。神様の前にへり下り、主の選びと導きを感謝し、信仰によって主を知る者とされましょう。

